

活動に至った理由・背景

東日本大震災で被災した子ども達に、動く保育室「子育て支援カー・ぱんぶきん号」で、移動巡回子育て支援活動を提供できるのではないかと考えました。「ぱんぶきん号」は、全ての機材、資材を持参した自立型の支援活動が可能で、軒先から軒先までをモットーに出前で活動しています。「ぱんぶきん号」により、効果的、機動的な支援活動が実施できると確信しました。さらに、復旧が遅れている学童の支援に注力する必要があると考え、子育て支援カーによる現地直接支援と平行し、「ぱんぶきんネット」を構築し、被災地との距離的ハンディーを越えて、学童を通じ被災地の復興を支援する活動を始めました。会が持参した活動メニューで、子ども達の感性にフィットした要望の強いものをネットにより配信を行うことを考えました。

活動地域の概要

当初、被災地の状況は、想像を絶する被害で、建物も流出し子育て支援カーを基地車にして、青空子育て支援から始めました。その後、仮設住宅、仮設の子育て支援センター、保育所、学童保育所、児童センターが開設されていきましたが、建物の器の復旧までが精一杯で、子ども達を安全に預かることに重きが置かれ、子ども達のケア、育成の部分にまで手が回りかねていきました。被災による地域崩壊に伴う人口流出と歩調を合わせるように、学童の指導員の離職、退職が始まりました。震災で、生活の基盤が掘り崩された為に急激な人口流出が始まり、指導員の職員達も職を求め故郷を離れ、その結果、当然、学童の機能も低下し、大人の社会の崩壊と共に子ども社会も崩壊し、極めて不安定な状況下に置かれています。根本に横たわる問題は、被災により、職を失ったことが最大の要因で、復興事業の遅れによって、生活上の問題から、特に若年世帯の転出が著しいことです。

人口流出、特に子育て世帯の流出は、子ども社会を不安定にし、更に、それに伴って、学童の職員の離職は、子育て機能の低下を引き起こしています。

設立年月 2000年4月

メンバー数

代表者名 松浪 智子（まつなみ のりこ）

〒080-1189 北海道河東郡土幌町中士幌西2線80-4

TEL.01564-7-4030/FAX.01564-7-4507

panpukin@cpst.plala.ne.jp

<http://www12.plala.or.jp/panpukin>

団体のミッション

会は、子育て支援を通して、地域、広く社会貢献することを目的としています。

つなげよう！ひろげよう！
こども達の笑顔リレー

ぱん・ぱん・ぱんぶきん

「岩手県沿岸部市町村」

子育て支援の復興にむけて。

ぱんぶきん号による支援活動

東日本大震災で子育て支援機能を失った岩手県沿岸部被災地の巡回子育て支援を、「子育て支援カー・ぱんぶきん号」を使い、2年継続して実施しました。刻々と変わる被災地のニーズに合わせ、会が10年間蓄積してきた子育て・児童支援のソフトの多様性と、会の子育て支援カーが持つ高機能、機動力、広域展開力が、その時々のニーズに対応できました。被災地の子ども達にがんばれ、がんばれというプレッシャーを与えることなく、自然体で支援をすることができました。

現地の直接支援と平行して、被災地の学童に一番要望されていた児童館活動のソフトの提供を児童支援ソフト「ぱんぶきんネット」という形で、現地学童とネットでつなぎ配信

するシステムを構築できたことが大きな成果であり、そのことによって、被災地学童と持続的な交流が可能になり、一過性の支援ではない、継続的な交流が可能になり、お互いの交流が続いているます。



子育て支援カー・ぱんぶきん号



釜石市





サマー・キャンプ、 ぱんぶきんネットの 活用

又、被災地の学童の子どもたちを「遊・遊・村サマー・キャンプ」に招待し、当地の学童の子ども達と一緒に食事を共にし、交流ができたことも、それ以降の交流につながっています。

子育て支援センターによる岩手県沿岸部被災地の直接支援活動も、「ぱんぶきんネット」や相互の児童の交流によって、的確に現地の状況を把握し、効果的な支援を実施することができました。学童の中には未だ再開の目処すらたっていないところもあります。学童は学校教育の外にある児童福祉施設ですが、その歴史的経緯から鍵つ子対策に始まり、今だ預かり保育の域を出ていないのが現実です。しかし現代にあっては保育所同様 子どもの育ちと親の就労にはなくてはならない施設になっています。社会的にも、学童の果たすべき時代的な意味と役割が十分に理解されているとは言い難い状況にあります。

今後、復興に向け、学童の入所児は増加すると予想されます。新たに入所してくる子ども達は、今まで学童を必要としていなかつた子ども達で、何がしかの心のケアと社会的養護を必要としている子ども達です。その為に、支援センターに学習用IT機材

を搭載し、動く「ぱんぶきんネット」教室を被災地各地で開設し、学童のスキルアップと学習の利便性を高めると共に、パソコンが破壊されたり、流出した学童には、機器を提供し情報力の双方向性を強化し、学童を通じ被災地の復興を長期に渡り支援しました。

震災も2年が経過し、現地には2年目の現実があります。震災による大きな喪失感はありますが、被災地でも現実を直視する姿勢が感じられるようになりました。失ったものは大きいのですが、いつまでもそこに止まつていられないという現実を直視し、未来への展望を語ってくれるようになります。そのことが逆に、私たちの心を癒してくれました。これからは、未来に向けて現地化した復興の時だと思います。その意味でも「ぱんぶきんネット」のソフト配信は、現地化し根付き、子ども達を支える一助になってくれているようです。

会の子育て支援センターによる支援活動は、岩手県で大きく評価され、岩手版子育て支援センターの開発にまで話が進んでいます。会は、その為の子育て





支援カーの開発と運用ノウハウを提供する予定です。H & C財団の助成によって、会の被災地支援活動が、効果的に実施できたことに深く感謝を申し上げます。被災地に撒いた種が、子育て支援カーの開発、子育て支援ソフト「ぱんぶきんネット」の構築、被災地児童と当地の児童との交流という形で、未来に向けて発芽しようとしています。

今後の予定

震災から3年目を迎えるとしている現在、国、行政による復興が本格的に稼働し始めています。会が2年に渡り実施してきた、被災地の現地の応急レスキューという段階は過ぎたと思っています。今後、会が力を入れるのは、岩手版・子育て支援カーの開発及び運用ソフトの提供と学童支援ソフト「ぱんぶきんネット」の配信、被災地の現状に即応した現地化を支援することだと考えています。10年間の活動で積み上げてきた支援カーの運用ノウハウと支援メニューを、支援カーの持つ機能と機動力と広域展開力で、岩手県沿岸部被災地の巡回子育て支援活動を継続していくと思います。

自立型支援活動は、効果的・機動的な支援活動を実施する事ができ、その中でも特に、復旧が遅れている学童の支援に注力し、子育て支援カーによる現地直接支援と平行し、距離的ハンディーを越えて、ネットで配信する「ぱんぶきんネット」で、学童を通じ被災地の復興を支援します。又、支援活動を通して結ばれた人との繋がり

りをより強固なものにし、現地ではできない新たなニーズが生じれば、会が対応できることは最大限応援したいと考えています。

今後、岩手県で行った活動の結果を検証しながら順次、宮城県、福島県に支援の輪を広げます。その時には、さらに多くの人々、団体、行政と連携をとって、協働の力によって事業を前進させます。ローカルな子育て支援、環境保全、地域づくりから出発した会の活動ですが、今回、東日本大震災被災地支援で北海道の外に出でて、会の活動が、広く社会と繋がっていることを改めて認識させられました。

今後、会のポリシーである子育て支援、環境保全、地域再生の諸問題について東日本大震災を契機に、被災地更には、広く全国の人々と共に、ネットワークを通して、協働して課題の解決を目指します。

団体設立の経緯

会発足の原点は、平成12年に子育て支援カーを開発したことになります。支援カーの完成と同時に有珠山が噴火し、被災地の子育て支援が最初の仕事になりました。その時の呼びかけに応じたメンバーで結成されました。その後、町内全域に子育て支援の光が届くよう「軒先から軒先まで」をモットーに巡回子育て支援事業を始めました。また、学校週5日制による小学生の受け皿として、土曜日に町内8小学校区を巡回する移動児童館、巡回児童ステーション事業も開始しました。平成14年より、子育て支援及び地域環境学習センター「遊～遊～村」を5,400haの敷地に開村し、小中高大生376名、大人51名と協働し、日本一小さな村づくりに汗を流し、子育て、環境、文化、各種事業に取り組んでいます。「環境なくして子育てなし」の理念の下、会では、子ども達、地域住民、行政と手を携えて、「親水塾」「はたけ塾」「親林塾」など各種環境事業とリンク、融合した子育て支援事業を、遊～遊～村を拠点に実施しています。